

神津島の  
お年より作文集

第十八集

大阪・・八戸そして神津へ 石野田 絹子（七九歳） 一頁

貧乏はしたくない 宮川 富美子（七九歳） 二五頁

私の人生 石田 喜久雄（八三歳） 四一頁

神津の電話が開通した頃 松江 睦 （八五歳） 六五頁

激動の昭和に生を受け 河合よし子（享年八三歳） 八九頁

# 大阪・八戸そして神津へ

昭和八年二月七日生 七十九歳

石野田 絹子（豊栄）

私の出身は大阪の吹田<sup>すいた</sup>で、六人兄弟の一番上の長女です。

神津島に来たのは二十七歳の時です。関西生まれの私が、関東の名前も知らない神津島に嫁に来るとは思いもしませんでした。

私は大阪生まれの大阪育ちで、家は代々八百屋をやっていました。八百屋といってもお店に並べて売る小売ではなくて、あちこちの会社や食堂などにまとめて配達する卸し問屋の八百屋でした。

戦争時代は十代の終わりから二十代最初の頃でした、食糧難もひどい時代でしたが、家自体は八百屋の商売をしていたおかげで、三食

分はなんとか食べることができていました。

だんだんと戦争が激しくなり疎開も始まり、すぐ下の妹だけ集団でお寺の方に疎開していましたが、栄養失調が原因で眼を悪くしてしまいました。まだ兄弟姉妹もいるので、身近で親戚の居る所ということで、四国の宇和島に家族全員で強制疎開になりました。でも一年も経たないうちに終戦になってしまいました。

終戦後もすぐ大阪に帰ったわけではなく、一年ぐらいは四国の方に居ました。戦争も終わって世情もある程度静かになって、生活するのに自分でも身を立てなくてはならないので、踊りが好きだったこともあり、親戚にも何人か踊りの関係の人がいたので“芸”で身を立てようと思って日本舞踊も習い、四国にいる時に『藤間流』の名取も持つことができ、芸子の仕事につきました。

そんなある日、お客の社長さんと私を含めた女性三人で、四国の宇和島から高知県へ抜けていく山道の途中、事故で車ごと落ちてしま

いました。私達女性三人と運転手は軽傷で無事に助かったのですが、お客の社長さんはあろうことか亡くなってしまいました。

その事故に遭うまでは、何とか自分で小さなお店でも持ちたいと思って頑張っていました。その社長さんが地域では有名な人だったので、亡くなった人の手前もあって、この土地でこのまま働いて、ましてや自分のお店を出すことなど出来ないと思い、気疲れしてしまい、もう嫌になつて、ここには居たくないと思い悩んでいました。すると当時青森県の八戸（はちのへ）にいた三つ違いの妹から「義兄のやのすけさんが八戸でお店も何軒も持っているし小料理屋もやっているから、お姉さんの手も借りたいと云っているし、こつちへ来て手伝って見たらどうですか」と言つて誘つてくれました。

井本やのすけさんという人は奥さんは八戸の人でしたが、四国の宇和島から長男でありながら八戸に行き、そこで飲み屋街をつくるなど手広く成功した人で、そのやのすけさんの弟と私の妹が結婚して

八戸に住んでいました。

その義弟のことですが、昭和四一年に貨物船の『稻荷丸』が利島沖で沈没して、全員が亡くなるという痛ましい事故がありました。その時の乗組員の一人が井本正さんで、私の妹の旦那さんでした。当時は八戸から神津に来ていて、稻荷丸に乗って働いていましたが可哀想なことになってしまいました。

八戸のやのすけさんからも、二年辛抱してくれたら自分のお店を持たせてやる、ということだったので思い切つて行くことにしました。

八戸は遠洋漁業の基地になつていて、とても盛んな時代でした。毎日、何百人という人達が出船入船で、船が出る時には近くの御料理屋さん等で身内等も入つて宴会を開いていました。十人以上になると「宴会」ということになつていて、私の仕事というのは、宴会場に出向いて、踊り、三味線等の芸を披露したり、お客さん達の接待をするわけです。遠洋漁業専門に出入りする船の総元締めから、

出船送り出しの大きな宴会を任されていました。

藤間流の名を持っていたので、それこそ看板の有るのと無いのでは、時間制で半値以下もの差があり、持っていたおかげで御祝儀も良くて、そこでは当時二万円ただけ이었습니다。

一日に二場所宴会を持てば、それでもう充分の収入でした。ですから別にお店の方のお金を当てにしなくても私は充分それで良かったんです。宴会場のお客さんを、その後小料理屋の方へ送り込めばよくて、もう御祝儀もいただいているので、そこに出る出ないというのは私の自由でした。

うちのお父さん（夫）と知り合ったきっかけは、お父さんがその頃、神津島のかなり大きな『栄助丸』に機関士として乗っていて、遠洋に出て八戸にも来ていました。遠洋漁業の基地なので、八戸に寄って、そこから北海道等の漁場に出て操業し、また八戸に戻って来てしばらく滞在するので、小料理屋のお店の方にもよく来ていた

らしいのです。でも私は遠洋の大きな宴会場の方が専門で、忙しくてそんなことは何も知りませんでした。

ある日お店の方から、まだお客が二、三人残っていて、お姉さんの顔を見てみたい、会いたいと言



八戸にいたころ

っているとのこと。「お姉さん三十分でいいから出てくれない」と言われました。「今日は私も精一杯外で働いてきたんだから、もう行きたくないですよ」と言うと、「前から頼まれていて、何度もダメで申し訳なくて、着替えて普通のままでもいいから顔出しだけして」というのでお店のお座敷に出ることになりました。

そのお座敷で初めてうちのお父さんと顔を合せました。縁というのは不思議なものだと思います。

お父さんはあのと通りの寡黙<sup>かもく</sup>で、必要なことしかしゃべらないような人でした。でも酒の方は強くて、結構飲んでいました。

それから何回か見えました。が、当時の栄助丸のお父さんが面白い人で、「姉さん姉さん、こいつはまだ独身だで、三男だから家督<sup>かどく</sup>も継がないし、生家はこいつが居なくてもいいだよ、婿に欲しいという話しがいくらでもあるだけでも行かないだあ、姉さん大丈夫だであ、こいつと暮らしたらどうだ」と言って、私に話してきました。私も独身で一度も嫁に行ったことはなかったし、嫁に行くんだたら、ちゃんとした生活をしたいと思っていたので、独身だということを聞いて惹<sup>ひ</sup>かれました。

あの時代、水商売をしていた女性には、特に独身というのは魅力的に感じられたものでした。本人は無口で、背もすらつとしてゐるし、

栄助丸のお父さんの言うことは本当かなあとも思いましたが、なにせあまりものを言わない人なので・・・。

でも若い時分に板前になりたくて料理の勉強をしたことがあると聞いたので、八戸の店の向こうを張って、私がこの人と一緒になつてここでお店でも持つてやろうかなとも思いました。

お父さんとの結婚話が早く進んで行ったのには、私がお店勤めをやめたいと思っていたこともあり。八戸に来た時、私は自分の持ち物、着物等の身を飾るだけの物は、ちゃんと持つて来ていた。で、他の仲居さんのようにお店が貸し出す着物を着て働かなくてもいいというのもあって、四分六分で、お店の売り上げの六分が私の取り分ということだったんですが、実際は違っていたり、他にもいろいろと条件が違ってきていました。それと腹が立ったのが、やのすけさんの妻でこの小料理屋の女将<sup>おかみ</sup>さんとのことでした。

この夫婦には子供が無くて、やのすけさんには妾に産ませた男の子

が一人いて、その子を家に入れて育てていましたが、その子の学校の送り迎えから食事の世話等をまかされていたのは、後に神津島に嫁に來た増恵丸の清水つせさんでした。

その子の事はつせさんにまかせていましたが、この女将さんは店の奥でじっとしているような人ではなくて、割ぽう着を着て料理の運びをしたり、皆と一緒に頑張って働くような人でした。

ある日、お客さんが私に向かって「姉さんはやのすけの妾なんだってなあ」と言ってきました。「なんてことを言うんですか！」と怒ると、聞いていた女将さんの方は、お客に向かって、なんと、「そうですねですよ、だからわざわざ四国の田舎から呼んだんですよ」とか「うちのおとうさんの妾ですよ」と平気で言っていました。

親族にも当たる私を、大事な自分の亭主の妾だ、それに育てている子供もまるで私の子供のように言い、子供も一緒に呼んで面倒みている、というような感じで平気でお客に嘘を云うことに腹が立って

しまい、女将さんにつめ寄ると「そんなに怒ることはないじゃない、良いお客さんにはねえ、長く来てもらわなければならぬんだよ」と言われました。

このお店はそういう商売の仕方をして、八戸というところはそういう気風のところなんだと思ったら嫌になってしまい、そんなこんなで、お父さんとのことも先を急ぐ形になってしまいました。

昭和三十七年の四月、本当に独身かどうか籍を確かめに行くようなつもりで、お父さんに付いて初めて神津島に來ました。

私が來た時に自転車で浜へ迎えに來てくれたのが、すみれ丸の子供のよしえちゃん一人で身内は誰も來ませんでした。

よしえちゃんは親から「あの芳一がなあ、八戸だか何処だかの芸者あがりを連れて來るつつうしかい、お前が迎えに行つてこおー」と云われたと後で言っていました。そんなわけで、お父さんの身内にはあまり歓迎されない嫁でした。

最初に連れていかれて「ここで泊れやあ」と言われたのが、浜から  
大家の前の道を上がる途中にあった、ただ木を打ちつけて窓が付い  
ていると  
いうよう  
なあばら  
家です  
た。そこ  
から少し  
歩いて上  
がれば親  
兄弟の住  
んでいる  
家がある  
のに、そ



神津に来てすぐのころ、正月

こへ連れて行こうとはしないで、身内がみんな私を敬遠しているよ  
うでした。

これも後で聞いた話ですが、婿に行く先が二軒ほど候補としてあつ  
たそうで、器量や身仕舞は良くても神津で住めるわけはないと、親  
として兄弟として一番にそれを考えていたようでした。

当時は東京からの船便というのはなく、高砂丸が下田から週に二  
便しかありませんでした。それも欠航が続いたりすると一週間も十  
日も足止めをくうような時代でした。私も四月なのに欠航続きで、  
いつそ帰れたかったのに帰れなくなっていました。

なんだかんだでそのまま嫁に入ってしまったというかたちでしたが、  
もう八戸時代とは生活が全然違って、戸惑うことばかりでした。

最初に住んだ家は、その頃は大家の前の道から降りる階段の先は  
すぐ砂浜だったので、朝起きると浜の砂ぼこりがすごかったです。  
たいがいどこの家も水道は外に一個所あるだけで、お風呂も外でし



た。結局此処には何カ月も居れませんでした。

その時の繁沢のおばあちゃんが父さんと従姉<sup>いとこ</sup>で、大変さをみかねて「可哀そうになあ、姉さんそれじゃあ、おいが知った所を探してみるから」と言って『伊助の隠居』を探して頼んでくれました。三畳で、押入があつて土間があつてという感じでした。

大堂で買ってきた石油ストーブでご飯を鍋で炊いて、それを空けて今度はおかずの煮炊きをしていました。

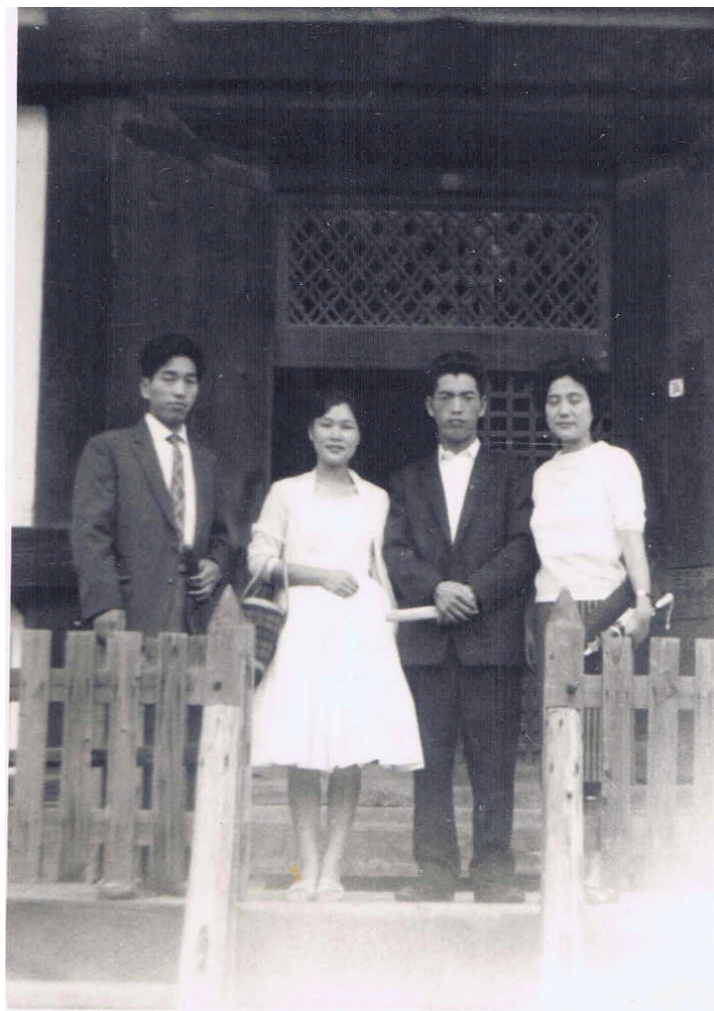
神津に來た当時は収入もなく食えなくて、大阪の実家の八百屋に夫婦してバイトに行ったりもしていました。お父さんは車の運転ができたので、野菜の配達にはもってこいで、給料は二万円くらい貰っていました。

そして伊助の隠居でまだ一年も経たないくらいの内に今度は基寿司の裏にある『左衛門』の隠居が空いたということでそちらへ引っ越ししました。そこは十畳程あつてけっこう住みやすかったです。

何年か住んでいましたが、今の場所に来ることは、以前たのは、以前ここは歯医者だったのですが、繁沢のおばあちゃんが「歯医者さんの家が空くよ」

と、また教えてくれて今の場所に引越しすることになりました。

神津島も段々に景気が良くなってきて、お父さんが自分で渡船の商売を始めることにしました。



大阪にて・左二人が妹夫婦



最初に造った『豊栄丸』はまだ五トン未満の船で、ずっと磯釣りを専門にしていました。

今の場所のに越してきた時分には、当時のマルベ（政次）の中村節男おじいさん、みやおばあさんが、その時分から伊勢海老専門の仲買人で、買った伊勢海老は全部箱に入れて港の中で流して置いてありましたが、注文が来るとそれをうちのお父さんが船で熱海だとか下田に運んでいました。

マルベのおじいちゃんはすぐうちの人を買ってくれていて、その時分の釣りのお客さんは、たまうに来ても一人か二人で、船賃は一人千円か千二百円くらいだったと思います。

二十年前みたいには、チャーターでいくらか一人いくらという時代ではなくて、一人分千円程で油代にもなりませんでした。

当時は石鯛釣りがメインの時代で、餌は伊勢海老しか使いませんでした。そうすると伊勢海老が千七百円で、お客さんの宿泊が橋本屋旅館さんで、船代を入れて五千円かからない時代でした。その中でも一番安いのが船代でした。

マルベのおじいちゃんが「辛抱せーよ、これが辛抱のしどころだよ」「豊栄はこれで男になるぞ！という時代が来るんだから、もう後何年とは云わないよ」とよく私ら夫婦に言ってくれました。

マルベの亡くなったおじいちゃんおばあちゃん、繁沢のおばあちゃん達はこんなうちの人の為になって下さって、本当に私達夫婦は感謝しています。

内地から嫁に来た私と増恵丸のつせさんには神津での生活や仕事に慣れるのも大変でした。

当時の神津の風習でさぐとって、女の人物が頭に掛けて運ぶのですが、前浜に『オオブト倉庫』があり、天草等を丸い大きな籠に入れて頭に掛けて運ぶという仕事があり、その仕事をしようと思い、ビール瓶や一升瓶を縦にしたり横にしたりして、ずいぶん練習しま

した。でもつせさんは出来るようになったのですが、私はどうしてもうまくできませんでした。

それでも『あづま』の小母さんがその頃漁協に勤めていて、そこで帳簿付けをしていて「頭にさげーなくても大丈夫だよ」と言っていて、乾かした天草等を竹の棒で丸めて束ねていく仕事をさせてくれました。たしか一日働いて百円か百三十円だったと思います。仕事が終わると「明日も出れるかやー」と云って誘ってくれました。

またこんなこともありました。その時代の話ですが、今のあずまの角の道は、当時二人並んで道いっぱいぐらいの細い道でした。

まだ寿司屋も飲み屋もない時で、あずまの家の側にそこを通って浜に行く人、帰る人が寄り集まる小さな窓のある三畳ぐらいの小屋があり、浜に降りて行つて、今日はダメだ（沖に出れない）となると、そこに寄つて夕方まで、いつも四〇五人が焼酎を飲んでいました。その横には空地があつて、天草を足で踏み固める場所になっていて、

焼酎を飲んで、そこで天草を踏んでいるおばさん達をひやかしたりしていました。

そんなある日、うちの船を時々手伝ってくれる人が走つてきて、「姉さん、姉さん、そこで姉さんのことを悪く言っているで」と教えてくれました。以前から私のことで変な噂が立ち、嫌な思いをしていたので、犯人がわかつたと思い、話を付けに意気込んで行きました。ただその前に相手の奥さんに断つておこうと思い電話すると、「ごめんね、姉さん申し訳ないね」と言っていました。奥さんの承諾を得たので急いでいって、窓から確かめたら本当に居たので、怒って怒鳴り込み、相手を足蹴にして溜飲を下げました。

後でお父さんから「女が男を足蹴にするなんてことは無い、めずらいことをすんなよ」と怒られてしまいました。またこれで村中の評判になつてしまったと思いますが、私もしたくてした訳ではありません。でも、どっちがめずらい事なのか・・・私にはこういう事はとうて

い堪忍することはできませんでした。私は良く言えば正義感が強い、悪く言えば短気なのでしょうか。

いろんな事がありました、神津に来てから一番良かった時といえば、昭和四十五年からで、やはり離島ブームの時代でしょうか、とにかく人に負けたくない人で一生懸命がんばりました。

下田にマンションを借りてそこに住んで、家には週に二日ぐらいしか居ませんでした。



二隻目の豊栄丸にて

下田航海をして今は七千円ですが、あの当時は下田から一人乗せて来るのに四千円、船代と伊勢海老を使っても一万円程で、また海はいくらでも魚が釣れる良い時代でした。

今のこの家は、歯医者さんが居た頃の家を木造の三階建てにして、2年程してから、部屋が四部屋しかないもので、それじゃあお客さんを入れて船宿をするのにつまらないということで鉄筋に作り変えたのが昭和四十年を過ぎた頃でした。

たしか宿代が一泊二食付きで二千円だったと思います。それでもお金自体に値打ちがあった時代でした。時代が時代だったので信用組合も使え使えとお金を貸してくれて、そして毎日、日掛けの集金にも歩いていました。毎日集金に来てもらっても、払えるだけの稼ぎがある、時代も羽振りの良い、そんなご時勢でした。

私の母もまた神津をうんと好きな人で、八百屋を引退してからは、一年に2カ月くらい遊びに来ていて、幸十郎のおばあちゃんと大の

仲良しになっていました。

また、もともとがそんな商売をしていたので、うちの手伝いで十キロのコマセの箱を指で二つ片手で持ち、両手で四十キロのコマセを車から降ろして冷蔵庫に入れる、冷蔵庫から出して車に積むというふうに、へたな男の人の三倍くらい働くような人でした。

そしていよいよ帰る時は、幸十のおばあちゃんが自分も東京へ行くので一緒に連れて行ってくれて、東京まで迎えに来ている他の子供に連れられて大阪まで帰る、という感じでした。

本当に神津が好きな人で、八百屋を辞めた時も、わずかな財産を兄弟であーでもない、こーでもないするので嫌になって、うちのお父さんに電話して「神津のお父さん、私を引き取って」と言ってきたそうです。「引き取れて、おばあちゃんどうしたんだ？」と言うと、「もうね、女の子四人いても、連れ添うている亭主は皆他人です。だけど神津のお父さん程良い人はいないから、どうせ年取っ

て住むんだったら神津が好きだから、神津に行きたいから私を引き取ってくれませんか」との電話だったそうです。兄弟姉妹との関係も気になり、大阪から荷物運ぶのに当時は五十万円以上もかかりましたが、神津に迎えることになりました。

それまでして好きな神津に来たのに、まだ半年も経たないうちに、さつま芋を食べていて脳梗塞をおこして倒れてしまい、広尾病院へ緊急ヘリで行きましたが、助かりませんでした。

あまりしゃべる人ではなくて、いいおばちゃんだったと周りの人からも言われましたが、当人も最後亡くなるなら神津でと思っていたのかも知れません。増恵丸のつせさんも私も、時々、何でこんなところまで嫁に来たのかな、と思ったりもしました。神津で住むのにいろんながあって、けっこう辛抱しました。でも、辛抱というより意地だったのかも知れません。

民宿の方も身体を二回程壊しましたが、十七年続けました。うち



親戚の結婚式にて

の人は一年おきに船を造り変えるような人で、最初に持った船が中古で、最後の船は借金返済分にと手放してしまいました。

一昨年の四月に嫁に出したその船をいれて、全部で5杯造りました。

今、お父さんはシルバー人材センターで仕事に通っています。

良い時もあり、悪い時もあり、苦労があつて今幸せがあるわけだと思いますが、これから

先はどうなっていくんでしょうかね？

私の人生もいろいろあつたけど、回りの人達にも助けられここまで来ました。でも、一番は良い亭主に当たったんだと思います・・・今はね。(笑い)

平成二十三年十二月

(以上聞き書き)

# 貧乏はしたくない

昭和七年四月二十五日生 七十九歳

宮川 富美子

私の実家は『忠エ門』で、七人兄弟の上から四番目に生まれました。昔は皆、貧乏で食べる物といえど『イモ』とか『ハゴ』とかで、戦時中はブドウの葉っぱとか、根っこも掘って食べたりしました。イモから作るハゴも、神津の女の人で作れる人は、今はあまりいなくなってしまうました。着る物も本当にろくな物は無いし、学校に履はいていく履物はきものも、靴の時代ではなくて、男も女もみんな藁草履わらぞうりを履いて行き、ランドセルやカバンなどもなく、風呂敷しよを背負しょって登校したものでした。ですから子供のころからずっと、貧乏は嫌だ、自

分が親になっても貧乏はしたくない、自分の子供ができてでも貧乏はさせないように頑張ろう！という気構えで暮らしてきました。

小学校時代の同級生は男女で六十数名いました。三年生か四年生の頃だったと



伝エの妹と

と思いますが、まだ戦時中で神津にも空襲の被害がありました。爆撃の飛行機が来るとサイレンが鳴って、校舎にいた生徒達は皆、学校の裏の山に整列して逃げ上がりました。今思うと、なにもアリンドウあり（蟻）みたいに列を作って逃げなくてもいいのと思いますが、その時分はそんな感じで、ちゃんと整列してから逃げていました。男の子達は山の上にあがって「一番いいや、こうしているが、一番



いいや」と言いながら、のん気に木の下でしゃがんでいました。

朝礼の時は、昔の先生はとても厳しくて、竹刀や棒を持っていて、二列で列をつくって並ばせて、行進させる時に動いたり背中をいかたりして少しでも列が乱れると「この後ろから、ちよつと待て！」と、止められて「お前達はダメだ！」と叱られるのが常でした。

ある日の朝礼の時、稲葉ゆたかさんが列から離れて、ボロボロと涙を流して泣き始めました。一緒に並んでいた私とゆたかさんの二人は残され、てっきり怒られるのかと思っていました。そして当時の中村先生が「何で稲葉、お前泣くんだよ」ときいたと同時に、すぐ気付いたみたいで「ああ、そうか、そういえばお前の兄さんは今日入隊したんだっけなあ、ごめんよ、そんなの知らないで、いいよ、もう帰ってもいいよ」と言ってくれました。それをきいて泣けてきました。今朝、軍隊に入隊する兄さんを泣きながら見送りに行ってきて、まだ気持ちが癒えないまま学校に来たのでした。



東京時代

戦時中だったか戦後だったか覚えていませんが、夜には山下彦一郎先生が『シントウ塾』という夜学を開催してくれていて、私も学校が好きだったので通っていました。子供から大人までいて、『おきみや』の信子さんや『モーゲー(亀屋)』の姉さん達、私達は小さい方で、『金エ』の睦兄など年上の兄いらがけっこう来ていました。

その塾がけっこうためになって、夜学で憶えたことを後で学校で教えてもらう、ということがよくありました。なんで終わってしまったのか、解かりませんが、あの山下先生のシントウ塾はすごく良か

ったです。

また、私がまだ学校に通っていた時分でしたが、学校の方で私を選んでくれたのか、土曜、日曜になると誰だか知らない人でしたが、その人が来て、私を大島支庁関係の事務所に連れて行ってくれました。当時は石山(神戸山)の採石も盛んな時期で、最初は長八(橋本屋)にあった石山事務所で「清七」の姉さんと一緒に働いたりしました。その後、事務所は「松屋」の上の藪やぶの中にあった小さな一軒家に移り、次に七軒町の方に引越をしてそこで働いていました。

でも、当時の尋常小学校を卒業する十二、三歳の頃には、神津の同級生のほとんどが都会に憧れて「東京に行く!」「東京へ出る!」と言っていました。東京や内地で働いている友達や先輩がたくさんいるので、あっちから「こーやー」、こっちから「こっちいこーやー」という手紙が来て、みんな都会に行きたくなるのです。そして、友達の善次の武子さんや六エの恵子さん達も行っていて、先導して



S38年 小学校建設時の工事仲間

仕事も紹介してくれるので、こりやあオイも行かなきゃあ!・・・というわけで、事務所を辞めて奉公に出ることにしました。

当時の「高砂丸」に乗って行きました。最初の奉公先は、静岡の伊東にある「桶屋おけ」で、桶や篩ふるい等を作る所でした。住込みの女中さんですが、御付おつけ(味噌汁)の実(具)も、どんな大きさに切ればいいのか、ジャガイモのむき方すらも知りませんでした。まだ小学校を出たばかりの十二歳ぐらいで、親元を離れて、他人の家に住んで働くということは、子供にとっては容易なこ

とではありません、可哀そうなもんでした。本当に今の子供達は幸せだと思っています。

その家には、私と年もそんなに変わらないぐらいの女の子がいました。朝、窓ふきの掃除をしていて、その子がきれいな着物を着てカバンを背負って学校に行くのを見ると、憎ったらしい憎ったらしいで、『オラも家がちゃんとなつてゝれば、貧乏でなければ、この女の子と同じように上の学校にも行かれるのに』と窓を拭きながらいつも見ていました。するとその様子を見ていたこの家のおじいちゃんが私に「お前も行きたいのか・・・。」と涙を流しながらやさしく言ってくれたのを今でも思い出します。

次に行った奉公先は、鎌倉の藤沢という所にある建設会社で、まるでヤクザの親分の家という感じでした。その家にはまだ小さな子供がいて、主人夫婦がまだ寝ている早朝に起きて、御付け<sup>おつけ</sup>を沸かして、オシメを洗いました。寒い時期で、洗濯すると手は真っ赤になって



大松の頃始めた民宿

しまい、干したオシメも、少しするとカチンカチンに凍るような所でした。

そして今度は東京の柔道の先生の家へ行くことになりました。

ここで憶<sup>おぼ</sup>えている事は、その柔道の先生から「化粧も何もしてこないで、鼻だか口だか分らないじゃないか」と言われたことでした。すっぴんだったからでしょうか？・・・それで化粧するようにしたのかどうかは憶えていません。

当時はまだ戦争中で、あちこちの家も焼け野原になっている状態でした。奉公の仕事は、本当に容易ではありませんでした。

貧乏と戦争とで、利口な子供もいっぱいいただろうに、上の学校に

も行けずに、生まれた時代と、生まれた場所なのか・・・運命？、宿命？とでもいうのでしょうか？、貧乏だけはしたくないとつくづく思いました・・・。

奉公が終わってから神津に戻りました。忠エに居て、石山で働いていたりしていましたが、河原村に嫁に行っていた『ごりざ』の姉から「こっち村に姉妹がいないしかい、『大松』に嫁に行っちゃーれやあ、富美子」と言われ、二十二歳の頃、この家に嫁に来ました。



孫の誕生日会

当時の大松はボロ家で、西風が吹くと雨戸や部屋の障子がガタガ

タと揺すれ、心張棒<sup>しんぱりぼう</sup>をしないというさくて夜は寝られない程でした。その当時の仕事は、女も男も工事に歩く人が多かったです。今の小学校の建設工事や天上山の下の砂防ダムの工事にも歩きました。工事がなければ、監督の所へ仕事を頼みに行ったりして、本当に容易じゃありませんでした。また海岸へ『藻<sup>も</sup>つく(打ち上げられた海草のかたまり)』を拾いに行っては、それを夜中まで『オオブト』とゴミに選り分けて、きれいにして売っていました。

大松には、おつな畑がなくて、『きぬさや』も三年程作りましたが、長くはできませんでした。学校の警備員をしていたお父さんの仕事が終わるので、『明日葉』の栽培をしようと、一生懸命になつて荒<sup>あら</sup>こをおこして畑にしました。お父さんが亡くなるまで明日葉を作って出荷していましたが、私一人ではできないので今はまた荒地に戻り、竹山になっています。

昭和四十年代の中頃には、『養蚕業<sup>ようさんぎよう</sup>』をやる人が出てきて、私も



五利左の姉と

家の前に小屋を作って、『蚕<sup>かいこ</sup>』が食べる桑の葉を山から取って来て、蚕を育てて、さなぎの『繭玉<sup>まゆだま</sup>』を作っていました。これも三年ぐらいやっただでしょうか、あまり稼ぎにもならず、だんだん下火になって終わってしまい、神津で養蚕する人はいなくなりました。

また私は右の眼の視力がほとんどありません。次女の好美<sup>よしみ</sup>がまだ保育園児だった頃、役場から買った杉山の山払いをしていた時、運悪く鎌<sup>かま</sup>が石に当たってしまい、石の破片が目に入って傷つけてしまいました。内地の病院に行って入院しましたが、とうとう視力が回復すること

はありませんでした。

入院している間、家ではお父さんが、保育園に持って行く弁当を持たせていたみたいですが、保育園の新聞だったか通知だかを後で見てもいたら、『好美さんのお弁当にはおかずに香々<sup>こうこ</sup>（たくあん）が入っていただけでした』と書かれていました。

この好美は、私が退院して神津に帰って来る日に「今日は、母ちゃんが帰ってくるだ」と保育園をずる休みして友達と二人で「ずる休みだしかい、見つかっちゃあだめだしかい」といって忍者のように隠れ隠れしながら港に迎えに行つたと云っていました。

まだ若いのに片方の眼が見えなくなってしまうと、他の人がしないサングラスを掛け、不自由な中、それでもずっと今までがんばってやってきました。

色々大変な思いをして、『だしかい、みんな貧乏のせいだあじえん！』と書いていました。昔の事で皆がそうでした。『だしかい、



貧乏は、はいしたかーないや、子供ができて、あが（自分が）食わなくても、子供ーば学校にやんなきやあ（通わせなきやあ）』と思つてがんばって暮らしてきました。

「このことだけーば、子供らに言つていていーろうか。」ハッ、ハッ、ハッ。（笑い）

それでも、昭和四十年代の始めの頃には、神津もパラパラと観光のお客さんが見えるようになりました。大きな家で旅館をやっている所はありましたが、民宿はまだそんなになく、数軒程度でした。でも、時々家でお客を泊めることができました。というのは、宿を取らないで来た客



平成23年 2月 弟と

が、民宿の看板を出しているわけでもないのに「今日、泊めてくれますか」と言つて来るからです。浜から近い家だったせいか知りませんが、仕方ないので「にしらあ、しょうがない、そこへ上がつてえれやー」と言つて待たせておいて、急いで部屋を片付けて泊まらせていました。そんなのが始まりです。

そんなある日『勝五』のじいさんが「富美子、お金のいい稼ぎがあるで」と言つてきました。「あにがやあ？」と聞くと、「民宿つう商売がな、すぐくお金が稼がれて、工事なんかより、よっぽど良いしかないな、早くやれよ、民宿をやれよ！」と言つてくれました。その後『離島ブーム』などもあり、お客さんも大勢神津に来るようになって、昔は夏場だけの営業でしたが、おかげ様で民宿は繁盛させてもらいました。長女の志津香が結婚してからは、釣り船と釣宿もやっています。民宿をやっていた時代が一番良かったと思います。子供の頃からの「貧乏はしたくない！」との思いも、民宿の稼ぎの



おかげで、貧乏を切ることができました。民宿をはじめた頃から、学生仲間と何度も泊りに来てくれて、神津を楽しんで帰って行った人達の中には、いまだに年賀状をくれる人もいます。

私自身も旅行が好きで、友達の『松屋』の松江鶴子さん達と行ったり、お父さんの友人に旅行好きな人がいて、夫婦で一緒に合同して、あちこちよく旅行しました。

旅行以外は、趣味という趣味を持つ余裕も無かったのですが、ネコが好きで、今まで飼ったのは三匹になります。三匹とも名前は『みい』と呼んでいました。ネコが一番かわいいです。

また、『千歳屋』の清水晴子さんがお店を始める前は近所に住んでいて、『編み機』を使った編み物をしていました。友達だったので私も教えてもらい、編み機を買い、『おおだり(縁側)』に置いて、セーターを編んで子供達に着せたり、知り合いにあげたりしていました。今はもう編み機はありませんが、亡くなった晴子さんとともに

に懐かしく思い出します。

自分の父も母も早死にで、娘達にも「おいも早死にだしかいな」とか言っていました。こんな長生きしています。

二人の娘も、長女は自分の努力で大学まで出ることができ、次女は『やすらぎの里』に勤めているので、今後とも安心して暮らせると思います。

(笑い)

孫にも囲まれて幸せに暮らしています。

平成二十三年十月

(以上聞き書き)



甥の結婚式

# 私の人生

昭和四年四月二十一日生 八三歳

石 田 喜 久 雄（丸一建材）

私は作和の次男で、兄と姉二人の四人兄妹の末っ子として育ちました。三年前に作和の兄が亡くなり、その前についじの姉が亡くなっている。兄姉も今は文治の姉と二人になってしまいました。母親は五郎造の出で、どちらかというと長生きの系統で、私が元気で働いていられるのは母親に似たのだと思います。

尋常高等小学校を卒業しましたが、当時は戦争も始まったりしたので東京には出ずに、家の手伝いをしたり、その頃、大里沢が水出がして崩れて、その崩れの林業砂防工事の石積みの仕事に出て、少し稼いだりもしました。この仕事で石積みの仕方を覚ええました。

昭和十九年に海軍予科練に志願しました。十六才になったかならないかの最年少で、神津で兵隊になった最後の人間です。もう少し早く出れば戦地へ行って死んでいたかもしれません。

その当時、甚吉の父が兵事係で、大島で一次試験があるので、甚吉の父に連れられて同級生や一つ下の仲間と受けに行きました。

一次試験に合格して、今度は二次試験が三重県の航空隊で行われるので、三重県まで行くことになりました。

その時たまたま地震があつて東海道線が不通になり、中央線を乗り継いで行くのですが、塩尻の駅で同行した内の一人が迷子になり、探したりしながらやっと三重県の津市に着き、三日間の試験を受けました。何とか全員合格して帰って来ました。

昭和二十年五月に私が一番先に入隊することになりました。

今度も甚吉の父が連れて行ってくれるものと思っていたら、その頃村会議員をしていた源五郎門の父と清次の祖父が東京都庁へ出掛け

るので一緒に連れて行ってくれることになり、そのまま都庁までついで行きました。

この時、神津では疎開<sup>そかい</sup>の話が出ていて、清次のじいさん等は都庁の人と神津の疎開先の話し合いの用でした。

東京都の人とじいさん達の会話が後ろの方で待っている間、聞こえてきて、疎開先の候補に山形県と奥多摩と後一カ所どこかの話をしていました。

この時、新島からもだれかきて疎開の説明を受けていました。

お昼に都庁でカレーライスをご馳走<sup>ちそう</sup>になり、とても旨<sup>うま</sup>かったです。

この入隊の時には一緒の船で新島から宮川国広君と大島から野口勇君の島からは三名でした。それぞれ別の隊に入って私は丹波市(今は天理市)に着きました。そこはもともと天理教の宿坊<sup>しゆくぼう</sup>で全国から天理教の信者がお参りに来たときに泊まる所で、広い敷地に何棟もある所を海軍が徴収して使っていました。

海軍航空隊なのに場所は奈良県でろくな飛行場もなく、すでに飛行機もろくになく、飛行機を操縦する訓練もできませんでした。

この時立派な飛行場や飛行機があったら、戦地に行くか特攻隊になって死んでいたと思います。

隊にいる間に大雨が降って、災害になってしまい、兵隊訓練と言うより災害復旧工事に当たっていたようなものです。

しばらくして終戦になり隊は解散して東京へ戻ってきました。

都庁での話が疎開先は山形でというようなことだったので、兵隊に



海軍一等飛行兵進 記念

行っている間、みんな山形に疎開していると思い込んでいましたが、奥多摩に居ると聞いて驚きました。

結局、山形は受入可能な人数が多かったので、新島と式根が疎開することになったようです。

神津の人達はまだ疎開先にいると聞いて、伊東で待っていれば余計な苦労もしなかったのに、事情が解らないままとりあえず家族の所へ行こうと思い、汽車で拝島まで行き、どうにかこうにか五日市に着きました。そこから数馬まではだいぶ先で、今日中に行くのは無理だと思い、泊めてくれる所を探していたら、たまたま聞いた家で「あの人がそっちへ今から行くから一緒に付いて行きなさい」と言われ、泊まらずにその日のうちに数馬へ着くことができました。

数馬での九区の疎開先は大変な所でした。作和は文治の家族と一緒にの家に居ました。道下の小さな草葺くさぶきの一軒家でしたが、清次の家族は道の上をいくらか上がった方にいました。下駄屋らはその更に奥

をずーと行ってまた道を上がって行く、牛小屋の隣の牛が顔を出すような所にいました。

しばらくして疲れが出たのか数馬で熱が出て頭が痛くなってしまう、動けなくて二日程寝込んでしまいました。

疎開先から配給を本宿までもらいに行くのですが、バス道より山越をして行くと近いので山を越えて行きました。

幾日か後に小河内だか御嶽だかの方にいた久助たかしの喬なつが山越をして来て、偶然に行き会い懐かしかったです。

終戦後も西多摩に幾日居たのか、やっと神津へ帰れることになり、伊東まで戻るので、数馬からみんなでぞろぞろと歩いて来るのですが、歩ける人は歩いて、歩けない人はリヤカーに乗せてひっぱって、しよぼいて、やっと五日市の駅まで来ました。

九区は疎開の時、食料や何やらを樽たるに詰めたりして伊東まで運搬船で運び、そこから人間は汽車で奥多摩へ行きましたが、どういう手

違いか荷物は届かず、そのまま伊東の市場にありました。

神津へ帰る運搬船が来て出るまで、その荷物が盗まれないように若い者が寝ずの番を交替でしました。他の区では帰りの荷物が盗まれたりしたそうです。

疎開先では食料が届かず苦劳しましたが、伊東にあった食料を持ち帰れたので当座食べる物があり助かりました。

畑もそのまま疎開に出たので、神津では食べる物が無くて、すぐ百姓をしないとで、物が取れるまでアシタバやら山芋を掘ったり、藤の根っこを掘り出し、葛をこさえてしのぎました。この時は本当の食糧難で猫も杓子しゃくしもあらゆる所を耕して百姓をしたものでした。終戦からしばらくはそうして食べるだけで精一杯でした。

暮らしも落ち着いてきて、文治の桶屋おけやを手伝うようになりました。それがと言うのも、ゆう子姉が下駄屋の喜曾子姉の従兄妹いとこの兄と結婚して、その義兄が桶屋をしていて、仲むつまじく暮らしていたの

に、あろうことか、早くに亡くなってしまいました。

当時、下駄屋の隠居が今の車庫の辺りにあり、そこで姉家族は暮らしていました。が、桶屋の道具もまだいくつか残っていました。

作りかけの小柄杓こびしやくがそのま



二十才のころ

ま置いてあり、作和のすぐそばなので、行き帰りに隠居の前を通る度にその小柄杓の作りかけを見て、可哀想でもごったくて、文治へ持って行って、あつた道具で続きを作ったら上手くできました。

それを見て文治のじいさんが桶屋の手伝いをするように言いました。文治のじいさんは気が向かないと働かない所があつたので、頼まれて作っていない桶や柄杓ひしやくがたくさんありました。

仕事は山に積まっでいて、見よう見まねで文治の仕事場に入って桶屋を始めました。

文治の義兄は終戦になっても日本へ帰って来られなくて大変でした。それから二年位して文治の兄が帰って来て、二世帯で住むには狭いので、文治の家を建て直すことになりました。

この時は戦争で空襲にあつて焼けた河原方面の家も建て替えるので、建築ブームのようになっていました。

材木の寄木よりぎを拾い歩いたり、山の木を切つて挽ひいて、どこの家もそうやって材料を集めて貯めて家を建てました。

材料の目途が立ち、家を建て替えるために桶屋の仕事場も取り壊してしまつたので、桶屋の仕事ができなくなりました。

文治を建てる時の大工の統領が半エの父で栄助の父とやっていて、その弟子に山田の森利もりとしがいました。

半エの父が「喜久、にしも仕事が出来ないもんが大工の手間をしれ」

と言って、森利の相棒にたくて何度も誘われました。それで、大工の手間をすることにしました。これが大工の始まりです。

大工と桶屋では、桶屋は自分一人で自分の家で出来ますが、当時の大工は施工主に使われる身ではありますが、座つてこつこつやる桶屋より、立ち回つてやる大工の方が仕事のし甲斐があつて、文治を一軒建てて、それから養よう之のおじさんの弟子になりました。

そうこうしてまだ半人前にもならないような時でしたが、金五の喜代松おじさんに誘にぎわれて北海道の夕張へ行くことになりました。

夕張は炭鉱景気で賑にぎわつていました。石炭の最盛期でした。

夕張炭鉱は、外国人が夕張の沢を登つていて、山の斜面に石炭が露出しているのを偶然見付け、それを北海道汽船という会社が始めたのだそうです。

喜代松おじさんはその前の年に兄弟の金五のおじさんが夕張で寿司屋をやつていて、その寿司屋の店を新築するので夕張まで家を建て



に行き、炭  
鉦の住宅を  
建てるのに  
大工が足り  
ないのを見  
て知ってい  
ました。  
寿司屋のお  
じさんの計  
らいで、山  
田の森利を  
相棒に、喜  
代松おじさ  
んが夕張の



夕張にて 左上滝一、森利 左下私、喜代松、

炭住を建てに行くことになり、弟子の与七の滝一<sup>たきいち</sup>も連れて行くことになりました。まだ一人くらい連れて行けるというので、私に声が掛かりました。私はまだ半人前のようなもので、ろくな道具もないのに、度胸<sup>どきょう</sup>が良くも、行くことにしました。

北海道への行きがけに東京で道具を買って、一昼夜あまり汽車に乗って青森まで行き、連絡船に乗って函館へ行き、夕張に着きました。五月に行って十月に帰る予定が十一月まで居ました。たしか昭和二十八年だったと思います。

夕張は寒い寒いで、風呂屋に行って戻って来るわずかな間に、濡<sup>ぬ</sup>れた手拭いがかちかちに凍って棒のようになり、戸や窓には目張りもしてあるのに、朝になると家の中で雪が積もっていました。

北海道では請負師<sup>うけおいし</sup>のような人が居て、その人に「あれをやれ、これをやれ」と言われて仕事をするのですが、喜代松おじさんも森利も滝一<sup>たきいち</sup>も黙<sup>だま</sup>ったような人達だったので、何でもかんでも交渉事をやら

され、人に割りまいを食わされるものと、言うべきことはちゃんと言いました。

秋田や新潟方面からも大勢の職人が来ていました。

炭住の五棟分位の材料が一山に積んであって、そこからてんでに自分の使う材料を持って行くので、「やい、はいく材料を持つばあ、割まいを食ってしまーわ」と言ってそこからってに取出しました。

夕張の真谷地という所で働いていたので、神津から真谷地当てに出した手紙が神津へ戻り、神津では本人に届かないので、金五の寿司屋のおじさん気付けで出し、そこで初めて手紙が届かないのを知り、私が真谷地の郵便局長当てに怒って文句の手紙を出したところ届くようになり、郵便局長が謝りに来ました。

大工仕事に関係ないそんな交渉事も多々ありました。

この年、神津は『ぼうけ漁』が大漁で、滝一の親元は漁師だったので干物やらなにやら送ってきてくれました。

北海道で初めてブロックという物を見ました。石炭の燃した殻<sup>から</sup>で作ってありました。そのブロックで炭住の側面を作って、内装と屋根を木でこしらえるようになっていました。内地の大工はどうだか判りませんが、神津では大工が基礎のコンクリー仕事もしていたのでブロックもすぐ扱えました。

この時にも交渉事すごいケンカをしました。役所が建てる住宅の図面をなかなかよこさないので仕事にかかれず、しょうがないので人のやってある基礎を見て同じに作りました。

昔は家の外に『しかい』といって、神津でも昔の中学の校舎に取り付けてありましたが、外壁の羽目に付ける三角のつつかい棒のような物です。

住宅に二カ所しかいを付けるのですが、出来上がったらずし寸法が違っていました。玄関や窓の邪魔になるわけではないのでそのままにしておいたら、現場監督が来て、ああだこうだと文句を言うので、

逆に「早く凶面をよこさないからだ」と文句を言い返しました。

北海道と言う所は、本州のような杉や竹が生えていないのですが、金五の寿司屋のおじさんが杉の電信柱をどこからかもらって来て、私にそれで寿司桶を作れと言いました。私が桶屋が出来ると知っていたのかどうなのか、しようがない、作るしかないのです、わざわざ東京へ道具を注文して送ってもらいました。まったく、北海道で桶を作るとは思いませんでした。

炭住もだいたい出来て、寒くならないうちに神津へ帰ろうとしていたら、真谷地で大火事があり、あらまし焼けてしまい、川に架かっていた吊り橋もワイヤが焼けて落ちてしまい、川のあちとこっちで行き来も出来なくなり大変でした。それで新たな仕事が出来て、神津へ帰るのが遅くなり、結局十一月まで北海道に居ました。北海道から戻ってきて、また養之おじさんと大工をしました。太七のじいさんが頭領で、養之おじさんと久兵エのおじさんと私と

で市平の家を建てました。今も残っています。また、兵エ門のじいさんとも久七や勝エの家を建てました。喜七を建てるときも親戚だったので手伝いました。善五の家は芝居小屋になっていたのを芝居をやらなくなったので、養之おじさんと大改修をしました。この頃には養之おじさんの<sup>せがれ</sup>倅の猛夫も大工見習いで一緒に働いていました。

丁度その善五をやっている時、長浜祭の前の日だったのですが、長男が生まれて七夜の日で、七夜のご馳走を作ったので、猛夫と養之おじさんも家に連れて、みんなで昼飯を食べていたら、庭に煙が充満



前列左父親、右二人目養之おじさん



してきて、干してある洗濯物も見えない程になってしまいました。何ごとかと思いい外に出てみたら、農協が火事になっていました。

当時の農協は治エ門の屋敷を借りて、そこで突つき屋（精米、製粉等する所）をやっていました。その突き屋が大火事になっていて、大騒ぎをしました。

この頃にはコンクリーの大きい建物は建設会社が請け負って造るようになりました。建設に頼まれて太郎エ門の前にあつた信用組合や風早かざはいの下かざはいの農協を建てました。



母、姑、姉達

この頃は民宿が盛んになり、古い家も民宿用にリホームしたりで、大工は皆忙しかったです。

以前から神津に材木を降ろしていた町田にある『真田屋』という材木屋が神津に店を出すことになりました。

真田屋さんは釣りに来ていたお客さんで、神津の建築ブームを見て「これは、商売になる」と赤羽の峠の所を借りて店を出しました。

真田屋は元々は相模原で製材を営んでいて、その次男が神津の店を任されていました。そこで富江（妻）が事務を頼まれて働くことになりました。

農協を建てた時のことですが、農協の仕事を頼まれても私は忙しくてやっていたられないので断ったのですが、清光丸の兄が何度も頼みに来るので根負けして基礎だけならということを手がけました。

基礎ができたので、内地から型枠かたわく大工を探してやってもらおうように言ったら、大工が見つからず、結局最後まで手がけました。

その頃、長男が東京の高校を卒業するので、富江が仕事を休んで子供の引越など東京へ行っている最中のことです。

真田屋さんが神津に来るので私が迎えに行ったら、船から青い顔をして降りて来ました。「あんだ、船に酔ったあな」と聞いたら、「そうじゃあないんだよ、石田さん、手が空いたら相談があるだよ」と言うので話を聞いたら、店が潰れてしまうということでした。

九州に買付け用の事務所があつて、九州の木材を購入して売っていましたが、九州の店は他人任せにしてあつたので、そこが借金を作つて、資金繰りが付かず高利貸しのような所から借りた金を返せず、本店の方に差し押さえが来たので、いずれこつちにも来るだろうということでした。

その話を聞いて事務を預かる富江も上京中なので、私も責任を感じて農協の仕事は人夫等に任せて、赤羽の店へ行つて帳簿を見て、全部の売り掛けの請求書を作り、倒産することは伏せておいて、店を

閉めて神津から撤退するということにして集金させました。

在庫もかなり有つたので、大工等と呼んで欲しい材料を安く売ってお金を集めました。

この時、真田屋さんは関庄商店を建てるので前金で資材を頼まれていましたが、材料をまだ半分しか納入してなくて、このまま店が潰れてしまえば関庄さんにも迷惑をかけるころでしたが、事なきを得ました。

その後に差し押さえが来ましたが、残っている物は倉庫と車と電話と帳簿だけでした。まだ何件か集金できなかった所があつたので、



自宅の庭で



そういう所には差し押さえが行ったかもしれません。

倉庫と車と電話は私が引き取ることにしました。倉庫に法外な売値をふっかけてきたので、怒って「倉庫を解体したら基礎を壊して地主に更地さらちにして返さなきゃあだが、自分らで解体して返せ！」と言  
い返しました。今度は妥当な値段を言ってきたので買い取り、峠の場所も更地にして地主に返しました。

当時、浜の売店の立て替えに材料の注文を頼まれることが多くて、私も忙しいので、ある程度の材料を仕込んで、神かめんかわの川の作左の隠居がまだ空き地だったので、そこを借りて材料を置いて、真田屋の仕事が無くなり、富江が家にいたので、店番をさせていました。

当時は、夏になると浜の売店が前浜に五件程あり、多幸、沢尻、長浜、返す浜等各海岸にもあり、観光協会が管理していました。協会の会員がくじで二年間の権利を当てて営業するので、二年毎に建て替えていました。この年はちょうど立て替えの年でした。

松村の家を建てたとき、材料を仕込むのに真田屋さんと吉平の長女の嫁ぎ先の材木屋とで見積を取り、東京まで両方の店に買付に行き、取引の関係が出来ていたので、電話注文で品物を送ってもらい、大工をしながら、わずかながら材料も売りました。言ってみればこれが今の丸一建材の始まりです。

材料の注文も増えてきて、真田屋さんの倉庫を買い取ったので、惣七と吉平の今の場所を借りて、そこへ建てて、本格的に



材木屋を始めたころ



材木屋を始めて今に至っています。

だいぶ前になります。喜代松おじさんが材木屋へ来て「にしゃあ、北海道の時のことを書いちゃーりやーい」と言いました。私が書かずにいたら、又来て、「おいが書いたどお」と言いました。（平成九年三月、第三集）

最近、滝一さんの長男の博可さんが「親父が元気なうちに北海道へ連れて行きたかったけん、一回も連れないうちに

逝ってしまつて、残念だあ・

・・」と言つていたそうです。

北海道へ行ったメンバーは私以外は亡くなつてしまいました。まったく、懐かしいです。筋の通らないことが大嫌いで、そんな時にはきちんとものを言つてきました。

今は材木屋を息子に譲りましたが、これからもまだまだ頑張ります。

平成二十四年一月

（以上聞き書き）



仕事場で作業



真田屋倉庫を改修して現在の店舗

# 神津の電話が開通した頃

大正十五年九月一日生 八十五歳

松 江 睦

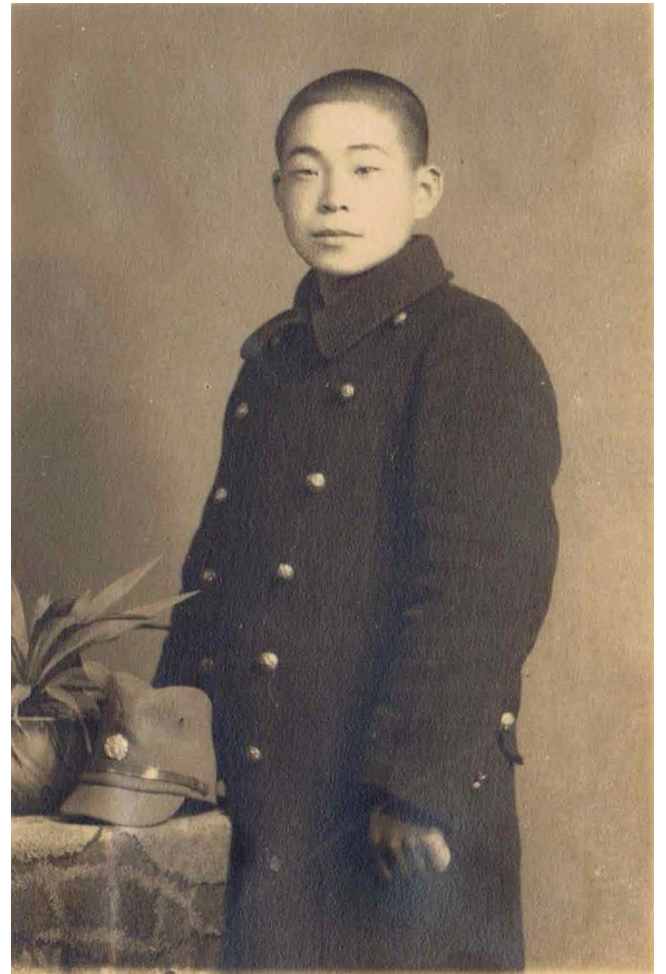
『神津で電話ができるようになる』というところで、局長から「その補修要員として行け」との話がありました。私はその時『電電公社』に勤めていたわけでもなく、『金工』で生れて、昭和十五年に『尋常小学校』を卒業してから漁師をしていました。でも話はもう決まっていたらしく、言われるままに上京しました

当時の東京は『都』ではなく、『東京市』でした。『支那事変（日中戦争）』は始まっていたましたが、まだそんなに戦争がひどくない頃で、まだまだ通りを走る車はほとんど無く、時々見かけるぐらいのもの

でした。馬に荷車を牽<sup>ひ</sup>かせる『馬力』が多く道路を通っていて、その道路は通る馬がそのまま糞<sup>ふん</sup>を落として行くので、とても汚く、道路一面が糞で白くなっていて、とても不衛生でした。

どんな仕事かも全然分からないまま、『電話線路』と聞かされていましたが、線路といえば電車の線路ぐらいしか知らないし、そんな程度で、実際行ってみてびっくりしました。『丸の内公務出張所』という所に行き、採用試験も何も無いまま、昭和十七年四月一日に即日採用という事で「明日から出て来い」と言われ、十七歳の春、丸の内にあった『東京通信局』の『築地電話分局』という所に配属されました。

『あにいやるだろーなー？』と思いながら翌日行ってみると、いきなり地下足袋と脚絆<sup>きゃはん</sup>、ペンチと工具さしの輪っかのついたベルトを渡されました。そして「島の電話補修員として、お前はここで修業しろ」と言われ、二年ぐらい、昭和十九年の春頃までいました。



昭和十八年 正月 十八歳

まだいるはずだったのでしょうが、時代は段々と戦争の激しさが濃くなってきて、二十歳で入隊検査をするは

ずが、人間（兵隊）が足りなくなったということで一年早まって、十九歳の時、八月に新島に行くことになりました。

突撃等の訓練はありましたが、そんなに嫌な感じではなかったです。

戦争の状況が悪くなっていて、皆各隊に配属になってから大砲の取

扱いを一カ月ぐらいで訓練されて、すぐ配備されました。

私は内地の戦地に行くことは無く、新島での『連砲隊』に所属して終戦まで新島にいました。大砲の部隊だったので、新島の南部にある『丹後山』に配属になりました。丹後山の三方は『トーチカ（機銃などを備えたコンクリート造りの小型の防御陣地）』がたくさんありました。大砲の設置してある所を見廻って歩くと、新島の南の浜の切り立った絶壁の上にもトーチカが作っており、そこにも大砲が据えてありました。

この頃になると、神津の近海を潜水艦が出没するとの情報も入ってきていて、新島でも何回も機銃掃射に見舞われていました。戦争が九月～十月まで延びていたら、私達も新島も、陸は空爆で、海上は『ボカチン（潜水艦の魚雷）』でやられていたと思います。

そんなある日、式根島に爆撃機が向かう時に、丹後山の私達の陣地から見下ろすと、その爆撃機が低空で下の方を飛んで行くのが見え

ました。私は大砲の標準を敵との距離に合わせる係で、銃器を下に見える機体に向けて撃てば、間違いなく百発百中で当たるという感じでした。班長が「やっちゃーるかー、やっちゃーるかー」と言つて、打つか打たないか考えていましたが、結局『撃て！』という命令が出なかったので撃ちませんでした。でも反対に打ち込んで撃墜していたら、今度は仕返しに新島の方が標的にされて、ひどい目にあつていたかも知れません。

新島で一番辛苦したのは水の無いことでした。神津みたいに『お観音』やら『長浜』やら『日向』やら、あちこちに水があるわけではありません。丹後山というのが、片道でだいたい神津という村から長浜あたりまでの距離がありました。

朝と晩に『背負い樽』を二つ担いで村まで降りて行き、村で水を汲んでまた山を上がるのです。晩に水を汲みに行く時は、日中に精一杯あがいて（活動して）いて、その上食い物は少つとでの水運び行進

なので、目は開いていても神経は眠っているのか、ある晩は、先頭を歩いていた者が、曲がって行くところを真つすぐに山の中に入つていつてしまいました。そうすると後の人間もそのまま付いて行つてしまつて・・・、しばらく歩いて途中で気が付いて「こ、こりやあ道が間違っているぞ！」と、それほどみんなが眠くて、そして疲れ切っていました。

それと不思議に思つたのが、あんな山の中で、なんであんなに『蚤』が増えたのか、ということでした。とにかくすごい蚤でした。夏の時期だったので、朝の整列をすると、半袖の縫い目にそつて、血をいっぱい吸つた蚤が、ずらつと並んでくつ付いていました。

そして時々『蚤取り！』という号令が掛かり、皆で一斉に蚤取り作業にかかりました。どうやるかというと、簡単です。血を吸われた主人は食べる物が少なくてガリガリに痩せているのに、蚤は腹いっぱい血を吸っていて、飛べないのか尻をおつ立てた状態で止まつて



いて逃げません、それを捕まえて指でプチプチつぶします。指が血だらけになりました。そんな有り様です・・・。

またこっちとは逆に、北の『若郷』の方では『虱』<sup>しらみ</sup>がすごかったそうです。同じ新島の中で、北と南で、蚤と虱に悩まされていました。

日本中どこも同じ状況でしたが、戦時中は食い物が少なく、しだるい（空腹な）思いをして、身に栄養が届かず皆がやせ細ってひどい状態でした。食器自体も使えなくなつて、一升瓶の下をお椀程の高さで割り切り、口が傷つかないように淵<sup>ふち</sup>をヤスリで削って汁物の器にし、茶碗は、夏場でご飯が傷まないように『よしず』のような物で編んだ蓋付きの籠<sup>かご</sup>で通気性のある『弁当行李』<sup>べんとうり</sup>が茶碗の代わりでした。肝心の中の飯は少ししか入っていないくて、おかずというと『メザシ』が一〜二匹、『香の物』として大根の葉っぱが切らない状態で二本ぐらい、そんなものでした。

ところが、そんな窮乏<sup>きゆうぼう</sup>状態で過ごしてきたというのに、いざ戦争

が終わってみたら、どこに隠してあったのかと思うほどの大量の食糧が、前浜にずらーと並べて置かれてありました。

アメリカの命令で銃器等は没収されました。銃器といっても鉄砲と連大砲が数本、速射砲等そんな程度でした。備蓄の食糧も出されて、置くところも無いので浜に並べたとのことです。食糧がこんなにもあつて、なんで喰わせなかったんだ！と思いました。

食糧難で大変で、ちゃんとした物がいつ食えるか分からない状況だったの、前浜に置かれたこの食糧を黙って置いておくはずがありません、皆それぞれで、かっぱらい（盗み）に行きました。ちゃんと見張りの留守番（新島の人）が居るのですが、新島の仲間が来たなど気付くと、知らんふりをして、『持つて帰っちゃーれ』とばかりに取らせてあげていました。

ところが神津の人だと知らない人達なので、なかなか難しかったです。『見逃して黙ってーてーよ』と言うわけにもいかなないので、怒

られて文句を言われても、「へい、へい」と低姿勢に頭を下げて持ってきた。

でも丹後山の備蓄食糧は何がどこにあるかよく知っていたので、そこから持ち出す時は、新島の人は何も文句は言いませんでした。米一俵を担いで、他に乾パンや乾燥野菜のネギ・ニ



昭和二十三年頃の旧神津島郵便局

ンジン・ゴボウなども持って山を降りて、神津まで持って帰り、家族も喜んでくれました。

除隊後はすぐ神津の郵便局に勤めました。当時は郵便局の中に電信・電話施設も入っていました。神津での通信の始まりは、私が生れる前の大正十四年に無線電信が下田―神津間で開始され、それまでは郵便以外の通信手段はありませんでした。

旧役場の庭にあった三十メートルの鉄塔から、会話ではなく、『モールス信号』でトン・ツー方式の無線でした。でもこれらの無線施設も軍によって撤去されていました。

待望の『電話』が開設されたのは昭和十九年の三月のことです。この電話業務が始まるということで、最初に書いたように私に話が来て、東京で二年間勉強し、そして戦争に取られたのでした。

この電話開通は、郵便局内にオモチャみたいな交換器(十二回線)が設置されて、加入者が十件、なんと島内間だけの通話でした。ちな



みに一番が郵便局、二番が『市<sup>いちじゅう</sup>十』、三番が農協、四番は他が嫌がるだろうということとで役場が引き取り、五番が『武<sup>ぶ</sup>左』、六番が船の扱い所、七番が漁業組合、八番が大野忠一、九番が小学校、十番が診療所でした。

十回線を確保するのに、最初は「電話を付けちゃってえ」と頼みに歩きましたが、「島内だけで通じる電話をあとにするだ、いらないよ」とけっこう断われました。電話番号を決める時は、五番、六番、七番、八番あたりは縁起を担いだりして、くじ引きで決めました。番号をとっ換えた所もあったみたいです。

当時は島内だけ通じる電話だったので、なかなか回線も増えませんでした。昭和二十六年に伊豆―式根島―神津島の海底ケーブルが一回線だけ開通して、やっと内地と話せるようになりました。その海底ケーブルを引くのにも、式根と神津の間の海底がすごく悪くて、電柱のように突っ立った山のような岩が何か所もあって、通常の何

倍もの大回りを  
をして神津に  
つなげて来た  
とのことです。  
最初は一回線  
だけだったの  
で、誰かが内  
地と通話して  
いると、その  
人が終わらな  
いと次の電話



電電公社時代

ができないという状態でしたが、段々と回線数も増え、交換台も増やし、普通に市外通話ができ始めると、昭和三十―四十年代にはどんどんと電話の申込みも増えていきました。

いっぺんには増やされないので、申し込んだ順番で繋<sup>つな</sup>げるのですが、皆待ちどおしくて「おらげーんがー（私の家は）いつ繋がるだ、えこひいきしてーるだな」、「おらげーんがー、あじ付けてくんないだ、あにか（裏で）やってーるずら」「あにかやんなきやあだめだーか」と、けっこう文句を言われたりもしました。

当時の電話は『磁石式』という電話で、中にコイルで巻かれた磁石の棒が三本あってその磁力線の入り切りで電気をおこしてベルを鳴らすというものです。市外電話の掛け方は、電話器の横に付いているノブをぐるぐる回して交換手につなげて、相手先の電話番号を伝えて受話器を置き、交換手が相手先の電話とつなげてから、今度は逆に、掛けた方の電話のベルを鳴らして「つながりました、お話し下さい」と云われてやっと電話で話せる。というものでした。

でも、こうして電話が普及していくのを見てきて『電話が通って、みんなが便利に使って喜んでいて、本当に村のためになっているなあ』と実感することができました。実際電話が家につながると、あるとないでは大違いでした。

私の子供の頃の話もしたいと思います。遊び場というと、私達は『酒屋<sup>さかや</sup>』の上の方にある『御殿山<sup>ごてんやま</sup>』によく行って『陣取り』だとか『チャンバラ』をして遊んでいました。『大家<sup>おおや</sup>』の土地なので、時々大家のじいさんが「ここにやろーども！」と言って騒ぎに（怒りに）来ましたが、子供達にとつては『何がそんなもん』というぐらいで、ほとぼりがさめると、また遊びに夢中になっていました。



電話交換器と交換手

神社の広場の方も遊び場でしたが、御殿山ではよく木から木をつたって、『利吉』の方の椿山まで競争していました。

昔は木もたくさん繁っていて、猿や忍者みたいに枝から枝へと渡って、勝った者は自慢したもんです。今の子供や親達には考えられないかも知れません。

そのおかげかどうか、東京で局に勤めて数日たってから、先輩に「松江、あの電柱の上の物を取ってこい」と言われて、「はい」と言つてスルスルと上がって取って来ると、「松江、お前田舎で何をやっていた？」と聞いてきました。「漁師をやっていました」と答えると「ヘーッ、漁師の仕事で柱を上があるのか」と言われたことがあります。（笑）

私は子供の頃から漁師が好きで、船に乗りたい、『トビ漁』に行きたいと思っていました。『春トビ漁』というのが昔あって、網を張って、夜に飛魚とびうおが網に刺さるのを取るのですが、その漁に行きた

くて、ともかく恩馳おっばしにも行ってみたいというのもありました。当時は『源八組』とかの『合』ごうという青年の集団組織があつて、そこにも入りたいと思っていましたが、まだ入る年齢ではなく、親も「生意気になるしかいダメだ」といつて許しませんでした。

尋常小学校というのは小学六年間と高等二年間の計八年間あつて、高等一年（今の中学一年生）の時でした、どうしてもトビ漁に行きたくて、家の者にも学校にも内緒でトビ漁に行く船に乗り込んで、『トモ（船尾）』の漁具等を入れる所の蓋ふたを開けて、知らんふりしてその中に隠れていました。そして船が沖に出てしまったのを見計らつて、突然下から蓋を開けて出ると、「こんにやろーどこに隠れてーただ」と、みんなおぼけた（驚いた）顔をしていました。「トビに行きたくて」と言うと、みんなが「オレッ、オレッ」とまた驚いた声を出していました。

その日は恩馳なぎに着くとすごい風なぎでした。夕方、十杯ぱい以上いた船の若

い人達は皆「夜飯よめしを食うびやあ」と言って、各々夕飯の仕度に取りかかっていました。するとその仕度をしている間に、一転凄風が吹いてきました。『疾風はやて』とでもいうのでしょうか、風がそよそよとしてるなあと思っていると、急にもの凄い風がびゅーっと吹いてきて、海もすぐぐ荒れてきました。みんな驚いて「夕飯どころじゃあない、早く逃げなきゃあだ！」と言って逃げはじめました。

その時『茂助』の『十二社丸じゅうにしやまる』という船がいて、当時はバーナーで爆発させて走る『焼がまエンジン』で、なかなかエンジンがかからず、「あにーやってえるだ、こんにゃろー！」と親父が梶塚かじづか（梶の先）で機関場の上をぶったたいて息子をさあい（怒って・どなって）いました。それほど皆があわてる海の急変でした。

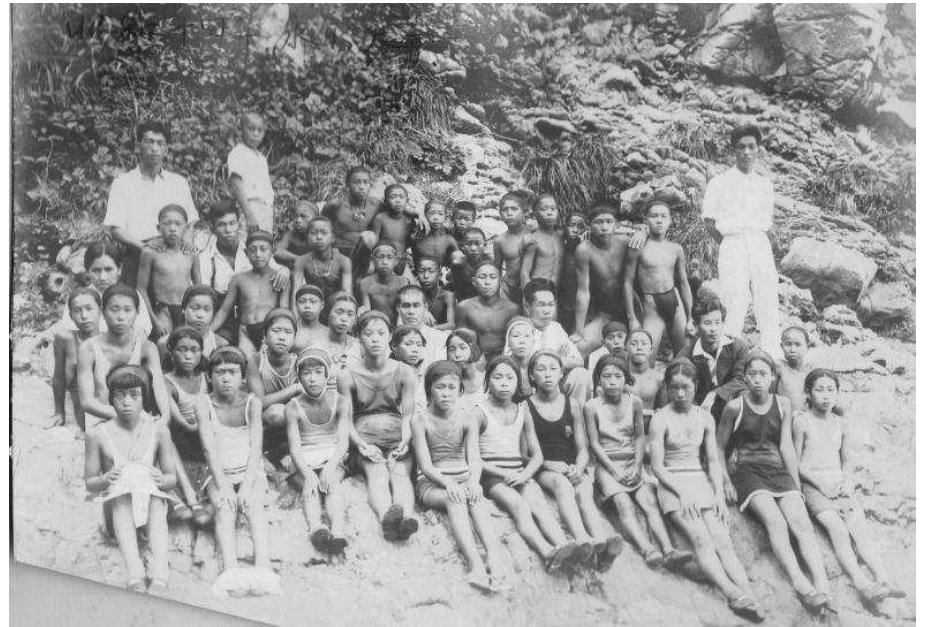
そしてみんな全速で戻りましたが、『もうり』の浜に波が向かってるので、『久作』の船が波に乗ってしまったって、浜にのし上げる寸前に、あわててひっくり返して沖へ出たりしていました。

昔の『ジナイカマ』で今のような堤防は無かったので、戻って来る春トビの船が全滅するんじゃないかと、村中が大騒ぎになっていました。もうりの『山見やまみ』から港の方まで、人が集まっていて、そして波をかぶっているジナイカマにも、この大波の中を寄せ来る波の寄りを見て渡ったのか三々四人の人が居るのが見えました。

波の寄りを見て『入れ！』と合図をして港に入りますが、その時に『重郎じゅうろう』の船が入りそこなって、『山長やまちよう』の下あたりに波に乗ってつかし込んでしまいました。でも、すぐ大勢の人がサーツと出てきて、太いロープを掛けて、その大勢の人達で簡単に陸おかへ引き上げてしまいました。一級船の大きな船でしたが、船体もそんなに傷んではいなかったそうです。

私はというと、私の乗っていた船は、その後に入るのですが、この時になって初めて『こりやあ、ただごとじゃないだなー』と子供心に胸に迫ってきました。それまでは子供だったせいもあって、事

の重大さが感じられず、『あにが、波がいつかきやあ、おもしろいや』ぐらいの感覚でした。大人の方は、しら真剣で、前方の突きん棒台の下にいた私は「危ないしかいさがれ！」と言われて『<sup>とも</sup>艦（船尾）』の方にさがると、二人の大人、『久作』と『半作』のおやじが、船が波に乗ると、梶塚を漕いで波を下り、乗ると下り、を必死になってやっついて、それを見ていて、『おいや、こりやあとんでもない時に乗ってまったなあ、家に帰っ



昭和十四年 水泳大会(式根島にて))

たらぶち殺される騒ぎだなあ』と、やっと実感できました。実際の者は、心配で生きた心地は無かったと思います。無事帰りましたが、忍び込んで乗った船で、こんなおつかない目に会って散々な初乗りでした。

たった二年の漁師生活でしたが、三回不思議な目に会いました。一回目は、今話したおつかない目に会った事で、二回目は『アオガイ』を見ることができた、ということです。

もう『合』にも入っていて、『夏トビ』に行つて網を流して飛魚を捕っていたのですが、あまり捕れなくて様子をみていた時、船頭の『<sup>しげざわ</sup>繁沢』のおやじが「おれっ、あの長浜の白くなつてえるは、変だなあ、アオガイじゃあないかなあ？」と言いました。みんなアオガイなんて知らないの、キョトンとしていました。

『あにしてもまあ、行つてみれよ』と船を走らせると、『網を掛けてみれ』とのことで、兄いらがなんだか解らないまま『あんだらう

なあ、あんだろうなあ』と言いながら網を仕掛けて、引き揚げよう  
とすると、重たくて重たくてなかなか揚がりません、そうしている  
内に、型のでかい飛魚が、網が揚がらないぐらいに掛かっている、  
たった一網で船は満船になりました。

船が飛魚の重さで前方に傾くので、網を後ろに置いてバランスをと  
ったほんです。「それ！『のぼり』だあ！」と、のぼり旗をたてて  
港に着くと、港がえらい騒ぎになりました。そしてトビ漁の権利は  
何隻もあつたので「明日っから順番組んで捕らなきゃあ」というこ  
とになって、五杯ぐらいの船が満船になるほど捕れました。

『アオガイ』というのは、大量の魚が卵を産むために浅瀬に寄つて  
来て、産卵と放精をした時に海が白く染まる状態のことだそうです。  
アオガイという呼び名も、見つけることがめつたに無いので、漁師  
歴の長い船頭しか知らず、若い者や中年の漁師でさえ、アオガイと  
いう名を知らませんでした。

三回目は、以前『新造』<sup>しんぞう</sup>に『新栄丸』という船があつて、家の親  
父と友達で、一緒に『引き縄』<sup>なわ</sup>に行くというので、私も一緒に行つ  
た時のことです。なかなか掛からないので、夕方になって「こりや  
あ、寂しいじゃあ、そろそろ家へ行くびやあ」と言つて、多幸沖か  
ら前浜近くになった頃、「ありやあ、アオガイじゃあないろうかな  
あ？」と新造のおやじが言うので「あんにしても、まあ行ってみ  
びやあ」ということになって向かいました。

すると海の中が『もうり』の浜のように白く見えていて、その場所  
に来たとたんに、四本流していた引き縄が四本とも凄い勢いで引い  
ていきました。急いで揚げると、四本とも丸太棒のような『黒マグ  
ロ』でした。そして次には鱸<sup>とち</sup>から三メートルぐらい流しただけで、  
マグロが喰うのが見えて、本当の『入れ食い』状態でした。

二メートル程でしたが、丸々と太ったマグロでした。船の上ではみ  
んな夢中で、時間でいえば、わずかな時間でしたが、いつのまにか



暗くなっていました。船の前方の網を入れるでかい枴ますに入れたのですが、そこがいったいになって、船が前方に突っ込みそうなので、他の枴の栓を抜いて海水を入れて安定させて、「のぼりを立っちやあれよ！」ということで意気揚々と港に向かいました。港ではやはりみんな驚いていました。アオガイだったのか、群れに当たったのか、漁師の時のいい思い出です。



平成二十四年一月 自宅にて

戦争も体験し、漁師、電話局勤務と色々経験してきましたが、電話たずさという当時の新しい文化が神津に初めて入ってくる時に、それに携たずさわれたことを嬉しく思っています。

(以上聞き書き)

＊昨年3月「お年より作文集」第十七集を皆様にお届けした後、しばらくして河合よし子さんが社協にいらして「お年より作文集を読んで色々思い出し、懐かしくて、また書いてみました、感想文です」と原稿をお持ちになり、それを預かりました。その後、六月の末にご本人は急逝され、ご家族に原稿を預かっている事をお伝えしたところ「本人が望んでいたのなら、もし紙面に余裕があるようでしたら載せてください」とのご返事を頂きましたので、掲載させていただきます。

## 激動の昭和に生を受け

昭和三年五月五日生(享年八三歳)

河 合 よ し 子

昨年の「お年より作文集」第十七集に魅せられて、又乱筆を走らせる事にしました。

石野田道春さんは、私の一級下でした。とても利発な生徒でした。

石野田さんの寄稿された記事を読ませていただき感銘、あの魔の日、三月十四日、恩馳の空爆。あの日私は役場にてお世話になっておりました。

私の父も空爆にあった仲間です。空爆の知らせを受け、救急箱を肩に掛け一目散いちもくさんに防波堤へ走りました。途中まで行きましたら、神津館(文吉)の父と、大久保(こびきや)の父が背負られて青い顔を・その姿を見た瞬間父を思い出し、思わず空を見上げ、お天とう様、私の命を縮めても父が元気な姿で帰りますように、と祈りながら走りました。

恩馳での犠牲者は、浜川幸男(幸内)兄と、梅田元治(万五)兄の二人でした、元治兄は私の一級上でした。私の父達は幸い無事に帰るこ

とができました。

父達は若い衆の揚げる網を受取る役で、岩の上だったそうです。そしてたら向うから爆音が聞こえ、機体が見えたと思ったら、もう父達の頭の上だったそうです。やがてバリバリと海へ機体からの投下が始まり、父は甥の池田元吉と岩の上をぐるぐると夢中で走ったそうです。とにかく飛行機は、海へ機銃掃射雨あられの如く、そのようなので海に入っていた若い命が奪われたのです。父達は岩の上で、あの牡蠣かきの上を素足のまま足袋たびもはかず駆け巡ったと云いました。やがて空爆も終わり、ふと海を見ましたら、海は血の池の如く。幸内の兄とは同じ網組なので、父も心配して海を見ましたら、どうでしょう、岩の下にて（海の中）幸兄が今にも海中へ頭を入れる寸前、海は血の海、父が「幸ゆき、しっかりしろよ！大丈夫だ、船はあるよ、連れて行くからしっかりしろ！」と大きな声で、そしたら「おやじ、おいやあだめだあー」と言つて目をつぶったそうです。

今のよう<sup>た</sup>にエンジンを焚いて港の出入りする時ならいざ知らず、昔は小舟にて櫓ろを漕こいでの出入り、どんなにか切なく辛い日々だった事かと、昔の人の我慢強さ、今の人達は我慢って云う事がどうでしょうか？・・・。

梅田武男さんの手記ですが、武男さんとは同級生です。今迄の寄稿文集にありますように何と記憶の良い人か。「新八」との話も書いてくれてあり、亡き友、恒代さんを思い出し涙を流しました。恒代さんも同級生で、毎日のように、新八の隠居がありまして、そこで勉強して帰ったものでした。武男さんの作文にも書いてありますように、恒代さんの母は志げさんといい、細身の優しい母でした。私達の育つ頃の貧困の生活がよくわかります。どんなに勉強が好きで上の学校へ行きたくても願いは叶わず、悲しい時代でした。

昭和十六年に戦争が始まりました。その発端は？・・・日本軍の真珠湾の攻撃が始まりと記憶しております。今思いますと、あの当時

私は役場にお世話になっており、毎日毎日、入営兵・出征兵を見送るのが日課でした。石野田さんの書にも「鬼畜米英」とか「欲しがりません勝つまでは」が合言葉。始まった頃は日本軍が優勢で、あの当時の米国の大統領は「ルーズベルト」氏、英国は「チャーチル」氏でした。「ルーズベルトのベルトがゆるみ、チャーチル、チル花が散る」と、あの大国をあなどり、結果はどうだったでしょう。本土決戦、沖繩決戦が戦場となり涙なしには聞かれぬはめに。「ひめゆり部隊」とか防空壕の惨劇、さんげき高い丘の上から次々と子供を海へ投げ入れ、乳児はおんぶして投身する心情、戦争は二度としないよう全国民が願う事でしょう。戦争とは人と人の殺し合い。

戦争も終わり、米軍より援助物資として神津へも贈られて来た「オートミール」。その品を前号で記したように、松村商店の蔵へ預けまして、役場より毎日、蔵のカギを持ち通いました。毎日、松村商店の母が私の行くのを待っておりまして。武男さんの手記を読み、

懐かしく涙がとめどなく、武男さん、残る人生を悔いなく頑張ろうね。

新エ門の出身のつる子姉の手記を読み、感じ、思い出しました。弟の啓吉さんとは同級生です。妹の葉子さんとも芸能保存会のメンバーで仲良く、頑張った思い出の数々。道で会いますと、「又（彦左宅）へ集まろうよ」と笑い話です。催し物がある度によく彦左宅へ集まり練習したものでした。つる子姉の思い出はもう一つ、白崎利子姉と二人で学芸会に（月の砂漠）を踊ったのを忘れません。空襲の記事も読み、河原村もひどかったです。文造の祖父と善次てるの照兄です。爆風にて亡くなったのです。私は役場に居りましたので、照兄は私の一級上でした。

下駄屋の喜曾子姉の記事ですが、思い出す事がいっぱいあります。運送業といいたしうか、ほんとに男の人以上に働いてがんばった一生を送った人と思います。村のため、ほんとに御苦労様でした。

よく私の姉が下駄屋の前田先生がとか、治工門の石田先生がと話した事を思い出しました。

バター造りの記事も書いてありましたが、私もよくバケツへ乳を入れて下の沢から須賀原の「三宅」まで運びました。私の家でも牛を飼育していました。祖父の代です。毎朝の日課でした。

牛も人間と同じで子牛を身籠<sup>みごも</sup>ると、お腹に十月十日といつて長い間かかりました。ほんとに牛って人の話が分かるのでした。やがて家を離れる日など、「今日は舟に乗って行くだあ、気を付けてなー」と祖父が云うと、目からポロポロ涙が落ちるのです。あの寺山の坂を登って行くのを何回見送ったことか。母の云った言葉が思い出され・・・「よしいー、牛を飼っている家へ嫁にいくなああ、雨の日も風の吹く日、雪の降る日、休みなくカヤを刈らなきゃあなんないしかい」あの母の言葉を思い出し、十九歳の年、日曜日の朝は雪が降りました。磯渡りをして、草鞋<sup>わらじ</sup>に白足袋<sup>しろたび</sup>と、あの名組の「ヤダテ

ラ」という山へカヤを刈りに行き、「歳の数だけさげえー」と十九束頭へ乗せ帰った日が、昨日のように思い出され、熱い涙をこぼしました。

河合よし子さんのご冥福をお祈りいたします。

神津島社協職員一同

## あとがき

「お年寄り作文集」の第十八集ができ上がりましたので、皆様のお手元にお届けいたします。

今回、最年長の松江睦さんの作文にあったように、当時電話を掛けるのは、交換手が相手の電話につなげてから、逆にこちらの方の電話のベルを鳴らして「お話し下さい」と言ってから通話ができました。子供の頃、電話のベルが鳴ったので、受話器を取ると、交換手さんの声の後、東京の親戚の声で「もしもし」と言うので、「もしもし、何ですか」と言うと、「そっちから電話を掛けてきたんでしょ、お母さんに代わって」と言われたことがありました。

電話ひとつ掛けるのにも時間や手間がかかっていましたが、何かその分、時間が経つのがゆっくりしていて、逆に現代は携帯電話のように時間も手間も省けるようになりましたが、何故か時の経つのが早くなったような気がします。今回、寄稿及び、聞き書きにご協力下さった方々に、厚く御礼申し上げます。

平成二十四年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第18集  
発行 平成24年3月  
神津島村社会福祉協議会  
TEL 04992-8-0819